

広島大教育 岩重 博文

目的 高齢者の住まいにおける温熱環境を把握する目的で広島地方(一部松山地方を含む)の実態測定を行い、合わせてヒアリング調査も実施した。比較基準を大学生とし、また、同じ人を被験者に選び夏期・冬期の測定を行い検討する。

方法 60歳以上の高齢者および大学生の男女計20名を対象者に選び、皮膚温(3点)および周囲気温(1点)の24時間測定を行った。この測定時間中の生活行動、着衣状況、全身温冷感、快適感、室温評価などの申告をすべて記入した。測定時期は夏期(昭和63年8月・9月)冬期(同12月・1月)の2回であった。

結果 1. 皮膚温と周囲気温の関係 i) 住宅熱環境評価基準値(58年)に対し、夏の周囲気温は主として基準値範囲内に分布している。高齢者女性のみ、少し高温のやや悪い環境条件下で行動している。この事は、昭和62年の調査において「非常に疲れる」と申告している人の多いことから伺える。冬の周囲気温は、基準値以下の低い温度範囲に主として分布しており、この地方の周囲気温の低さ、暖房設備等の不備が認められる。ii) 胸部皮膚温は夏・冬で大きな差はないが、足部皮膚温の周囲気温による影響がかなり大きく、冬広い範囲に分布する。こたつやストーブの影響もみられる。2. 全身温冷感申告 i) 夏・冬いずれも「丁度良い」と申告する者が一番多いが、夏の申告数は冬の申告数よりかなり少なく、夏の高湿度や冷房設備の不十分な点が原因と思われる。ii) 「丁度良い」と申告する場合の周囲気温範囲は冬きわめて広い。これは局部暖房や着衣量の増加などによる保温対策がなされているためと考えられる。